

<b>部門名：</b> <b>校内研修プログラム開発・実践</b>	<b>エントリー名：</b> <b>牛久市立下根中学校・野上 徹</b> <b>平成30年度 第5回 中堅教員研修</b>
<b>活動名：学校マネジメント～若手教員の授業づくり支援を通して～</b> 主タイトル（12文字以内） 副タイトル（16文字以内） ※どのような課題をどのような手法で解決したのか、わかりやすく伝える案件名を記入してください。	
<b>解決すべき課題：</b> ※活動を行う前に、課題や目標をどのように設定しましたか？視点などを含めて記載してください。また、当機構主催研修終了者は、研修から何を学んだかに触れつつ記載してください。 <p>本校には、3年次2名・2年次4名（うち1名は栄養教諭）・1年次4名（うち3名は今年度初めて教壇に立つ教員）、さらに経験5年以下の教員を加えると計12名の若手教員が勤務しており、全職員の約25%となる。本校では、学校マネジメントに若手教員を育成し即戦力として参画させることが重要な課題となっている。また、茨城県の資質向上に関する指標では、経験5年以下（形成期）の若手教員に必要なことは授業力の向上と記している。若手教員の授業力向上が学校マネジメントに大きく影響することは言うまでもない。よって、校長の学校経営ビジョンである「協働的な学習を通して、共に学び共に育つ」の目標が達成できるよう若手教員の授業力向上に着目し、この課題を設定した。</p>	
<b>目標・方針：</b> ※課題を解決するためにどんなストーリーやシナリオを構想して、活動内容を組み立てたのか、記載してください。 <p>牛久市の教育目標である「一人残らず質の高い学びを保障する学校づくり」をもとにして、本校の授業スタイルはペア学習やグループ学習が中心である。また、教員は生徒の様子を観察しながら授業を行うことが必要とされる。全体（コの字形態）での学習は、一人の「分からない」という言葉を全体で共有し共に考え寄り添う時に行う。以上の授業実践が最低限できることを目標として若手教員の授業づくりを支援した。具体的な支援方法については、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>（1）研究主任及び教務主任による校内研修の計画（毎月実施すること）</li> <li>（2）他校の授業実践を管理職と共に参観</li> <li>（3）牛久市教育委員会指導課指導主事による授業観察及び指導助言</li> <li>（4）管理職と教務主任が連携して授業の流れを1枚のシートに作成し、それをもとにした授業づくり</li> <li>（5）同教科のミドルリーダー及びベテラン教員と若手教員によるOJT研修</li> <li>（6）管理職による授業観察及び指導助言</li> <li>（7）授業づくり等の研修会に管理職や中堅教員、ベテラン教員と共に参加</li> </ol>	
<b>活動内容：</b> ※目標・方針に基づいてどのような活動を行ったか、また、複数の活動を展開した場合はその位置づけや関連性を記載してください <ol style="list-style-type: none"> <li>（1）毎月の校内研修でワークショップ型の研究協議を実施          全ての研修において研究協議を行った。研究協議は、生徒の授業同様教員同士で3～4人のグループを作り取り組んだ。協議内容については若手教員が協議しやすいように研究主任及び教務主任が毎回設定し、視点を決めて行った。</li> <li>（2）他校の授業を参観          下根中学校区内にある小学校2校に教頭と若手教員で他校のベテラン教員の授業を参観した。それだけでなく、市内小中学校全てにおいてペア学習やグループ学習を中心とした協働的な学習の授業実践を行っているため、他校の校内研修に参観し、授業づくりについて指導助言できた。教頭からの指導助言だけでは一方的な押しつけになってしまうので、まず始めに若手教員に授業を参観して気付いたことや見取ったことを言わせてから指導助言を行った。</li> <li>（3）指導主事による授業観察及び指導助言          教頭のコーディネートにより1年次の若手教員を中心に、指導主事が定期的に授業観察し、指導助言を行った。写真や動画を利用した指導助言が効果的であった。</li> </ol>	

**（4）授業づくりの基盤となる「学びの下敷き ～下根中授業スタイル～」の作成（左図参照）**

校長監修のもと、教頭及び教務主任が授業の流れを「型」にし、若手教員だけでなく全職員に対して同一步調で授業が展開できるようシートを作成した。全ての職員が、このシートを持って授業に臨んだ。もちろん、授業づくりもこのシートを参考にして行った。

シートには、授業開始から5分以内に課題提示し、グループ学習を行うことや、グループ学習から全体（コの字形態）学習に戻すタイミング等が記載されている。また、ペア学習を効果的に取り入れる方法も触れている。さらに、授業では、必ず「振り返り」を実践することになっているが、教科担任が「まとめ」と「振り返り」をはっきりと区別できるように、「振り返り」を取り組む際の形態や時間、さらに「どんな内容を書かせるか」等を記載した。

**（5）OJT研修**

教務主任が調整し、教科ごとに教科部会を毎月設定した。この部会では、ミドルリーダーやベテラン教員が若手教員と授業の進捗状況や課題設定の工夫、授業づくりや相互の授業参観を計画し、実践した。同じ教科という共通点や小集団での話し合いができるので、授業をつくるに当たって若手教員にはとても効果的な方法であった。

**（6）管理職による授業観察及び指導助言**

校長及び教頭が若手教員だけでなく全職員の授業を観察した。特に、若手教員の場合には50分間観察し、授業終了後にすぐに授業の振り返りを行い指導助言した。前回の助言を実践していれば、「すぐ実践したこと」を賞賛した上で、次へのステップアップにつながるような助言を行った。教頭の指導助言内容は、必ず校長に報告し、校長の教育方針を的確に伝えられるよう配慮した。

**（7）「茨城学びの会」が主催する授業づくり研修会等への積極的な参加**

校外で行われる授業づくり研修会に教頭から全職員へ参加を呼びかけた。特に若手教員には参加を積極的に促し、管理職と共に参加させた。研究協議では、教頭と共に授業づくりや振り返りの視点についてグループ討論し、互いに研鑽できた。また、参加した際には、研修会を振り返っての研修レポートを自由形式で作成・ファイリングし、全職員で回覧した。

**活動の成果：** ※課題設定に対して、どんな影響、変化あったか、参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

- 授業づくりを通して学校全体で若手教員を育成しようという意識が高まった。また、若手教員が自分の実践を論文にまとめる確約をするなど自己研鑽の意識が高まった。
- 校長の経営ビジョンである「協働的な学びの実践」を全職員に浸透することができた。さらに、職員室内で授業づくりの話題が増え、主体的・対話的で深い学びの授業実践につながった。
- 若手教員を育成することによって、ミドルリーダーやベテラン教員の資質向上につながった。
- 学区内の小中学校で相互に授業参観することにより、学校段階間で同じ形態の授業展開がなされるようになり生徒の授業に対する取組の意欲が高まった。9年間の一貫教育にもつながった。校外での研修会資料を全職員に周知することで、課題づくりの参考になった。

**アピールポイント（アイデアや工夫）：** ※3～5つ程度、箇条書きしてください

- 若手教員の育成を「授業力向上」の視点に絞って取り組んだこと。
- 学校だけでなく、牛久市教育委員会指導課指導主事と連携して取り組んだこと。
- 若手教員に対する指導助言内容が、指導者によって大きく異なるように授業づくりマニュアルシート「学びの下敷き～下根中授業スタイル～」を作成し、全職員及び教育委員会指導主事が指導助言の際に活用したこと。